

天之日矛伝説入門

川岸 龍一

天之日矛の語は、古事記と日本書紀、それに風土記で述べられている。日矛伝説の概要と簡単な解説をまとめてみた。

I- 古事記の中の天之日矛

アノノヒボコは、古事記では天之日矛と書かれている。日矛の記事で特に注意すべきは、日矛の語よりも子孫のタジマモリの語の方が独立した形で先に書かれていること、日矛の系譜が書かれていること、出石乙女の語がある、などである。

I-1 タジマモリ

(垂仁記)

垂仁天皇(11代)の時、三宅尾(ミヤケノムラジ)などの祖先の多遲摩毛理(タジマモリ)を常世(トコヨ)の国へ「ときじくのかぐのこのみ」を取りに行かせた。タジマモリが「ときじくのかぐのこのみ」を取って帰ってきたら天皇は既に死んだ後であった。

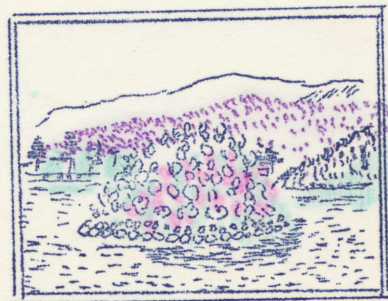
タジマモリは御陵の前で泣き叫んで死んでしまった。「ときじくのかぐのこのみ」は今の橋(たかはし)のことである。

(雨降記)

垂仁天皇の御陵は西大寺の南の尾ヶ辻にあり、堤の中に小さな島があって、タジマモリの墓と伝

えられる。トキジクノカグノコノミ」とはミカンであるともいい、又、これが栗子の始りであるので「タジマモリ」は栗祖として祭られている。垂仁天皇の宮は南向にあり、兵主神社の境内にはタジマモリが祭られているが、付近のミカン畑はタジマモリのもつて帰ったミカンを植えたのが始まりと云う。

天之日矛よりもタジマモリの語の方が先に出てきているのは奇蹟である。三宅連は豪族で外交に從事し、屯倉(ミヤケ)を管理していたが、難波吉士と異族で先祖は五十孫(ササキ)で神功皇后に反乱を起こしているのである。先祖が逆者であると書かれるとまずいので、タジマモリ(但馬守)を先祖とし、タジマモリを忠臣とする語を作ったのであろうと考えられている。



アカル姫と日矛の来日

昔、新羅の国王の子で夫之日矛という人が日本にやつてきた。なぜ日本に来たかというところ、新羅の国に名があつて、そこで女が文陽の光姫部を照らされて赤い王を生んだ。

その赤い王がまわり回つて日矛の手に入つた。赤い王は美しい女になつたので日矛は移住したが、ヤガで女は逃げて日本へいつて難波に住んだ。この人が難波の比売語管の在りるアカルヒメである。(以上は連載中のアミノヒメの次2回を参照)

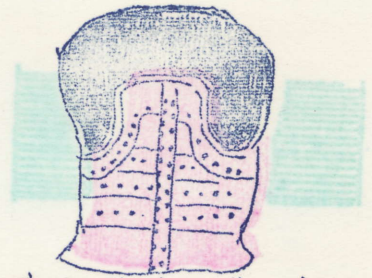
日矛は追いかけてきて日本にきたが、渡の神が邪意をして難波に入れなかつた。それで、さらに引き返して但馬国に来て住んだ。

(解説)

この記事は、元神天皇(オホノ代で、神功皇后の息子)の所に「昔、日矛という人がいて日本に来た」という形で書かれており、いつ頃に来たのかは明確でなく伝説を紹介するような形式をとつてゐる。

渡の神にさえぎられて難波に入れなかつたというのは、古瀬戸である。渡の神は、後にヤマトタケルが征伐したという難波柏原神(ナニワノカシワノワタリノカミ)であろうか? 場所は国鉄塚本駅付近の柏原あたりらしい。

、「さらに引き返して但馬に来て住んだ」ということから通常は瀬戸内海を引き返して山陰へ回つて但馬へ行つたと解釈されているが、但馬へのコースは古事記と異なつてゐる。



日光や卯や申の話の話は良に述べたのである。

1-3

日矛の系譜と神功皇后

日矛は但馬の^{マタ}後尾の女、前津兒と結婚して出来た子供がタジマモロスク。その子タジマヒネ。その子タジマヒナラキ。その子タジマモリ。次にタジマヒタカ、次にキヨヒコ。このキヨヒコが当麻の咩(メヒ)と結婚して出来た子がスガノモロス、次に妹スガノカコラドミ、タジマヒタカが姫のコラドミと結婚して出来た子が、菟城の高麗(タカカ)は元命。この人は息長帯城命(オキカガタラシヒメノミコ)(神功皇后)の母親である。

(解説)

日矛の系譜については、最近出た文芸誌「すばる」8月号に民俗学者の谷川健一が「青銅の神の足跡」の中で詳しく論じてゐる。日矛の系譜は、元神天皇の所で、元神天皇の母親の祖先(ルーツ)を述べる為書かれているのである。神功皇后の祖先が日矛であるというのは単なる「デツクあり」であるとか、逆に本当の血縁関係であると考えたのではなく、天之日矛のもたらした宗教と神功皇后の宗教が同じであるという宗儀系譜が示されていると考えた方がよいと思う。

I-4

日矛の神宝(出石の神宝)

天之日矛のもつてきたものは 玉津宝(立洲の宝) といつて 珠ニ貫(タマフツラ) (玉を縄に貫いたもの2つ) 又 浪振る比礼 浪切る比礼 風振る比礼、風切る比礼、又 奥津鏡、辺津鏡、あわせて8種類である。これが伊豆志(出石)の八前の大神である。

(解説)

神宝は宗教上の祭器である。比礼は航海の時に使ったと考えられ、日矛族が航海術に秀でていたことが 宗教的な面からも推定できる。出石神社は日矛を祭っているのではなく 出石の神宝を祭っているのである。神宝に玉があり、日矛の伝承に アカル姫が赤い玉であったとか、白い石であったなどとされているように石や玉に対する信仰があり、イズシは巖石(イツ)で石神奉祀からつけられた名前であるとも考えられている。

I-5 出石乙女

この神の女(ムスメ)に出石乙女がいた、多くの神々が出石乙女を自分のものにしようとして失敗した。ここに2人の神がいて、兄を秋山下氷男(アキヤマノシタビオコ)、弟を春山霞男(ハルヤマノカスミオコ)と言った。兄は出石乙女と結婚出来ぬが水が、弟は、簡単だよと言ったので、賭をする事になった。弟は母に相談して、

衣服と弓矢を籠のたてで作つて 乙女の家に行く。衣服や弓矢は藤の花になり、それでお家の中に入り乙女と結婚できた。兄はうらやましがって賭の品物を渡そうとしなかつたので母は兄を呪(ノロ)つた。兄は8年の間、病気になつた、兄は母親に許しをうたので 兄はもとの体にもどつた。

(解説)

出石乙女の話は 古事記の中で最も美しい物語であると言われている。古事記は歴史書よりも伝説や物語的な要素が強い。

出石乙女の話は、但馬にいた語部(かたりべ)が伝えていたであろうと考えられ、地方における語部の存在も重要である。

II 日本書紀の中の天日槍

日本書紀では 天日槍と書かれている。槍をホコと読むのは我々にとって難しい読み方であるが、昔は槍はホコで、ヤリは鉾(ホコ)から変化した武器で、鎌倉時代末期からよく使われるようになった。鎧(ヤリ)と書かれていたが、徳川時代に槍をヤリというようになったとか。

さて日本書紀は 歴史書として資料を整理して書き、考証も行なっている反面、国家としての考え方でまとめられていて作偽的部分も目立つので、注意して読むことが

必要である。

II-1 ツヌガアラシト参上

(垂仁紀2年) ある本によれば崇神天皇(ミマキリヒコ)の時に額(ヒタイ)と角の生えた人が船にのって越前の国の筥鏡浦(ケヒウラ)(敦賀の対比)に来た。それがその地名を角鹿(ツヌガ)敦賀、というようになった。彼は「大加羅の王子ツヌガアラシトです。

日本に聖皇(ヒジリキミ)がいると聞いて帰化しようと思ってきました。穴門(長門)に来た時にイツツヒコというのが「私が国王である」といったが、その人をよく見ると王でないことがわかったので出雲をて、ここに来ました」と答えた。この時、崇神天皇が亡くなってしまったのでそのまま滞在し、垂仁天皇に仕えて3年になった。天皇は「お前は先の天皇(崇神)の名前 御間城天皇(ミマキノヌラミコト)の名をとって お前の国の名になさい」と言った。それで赤織の帯をよせて本國へ帰した。その国をミマナというのは、これが元々になっている。ツヌガアラシトはもらった赤稿を書き入れていたが新羅の軍隊が来て全て奪っていった。これが二国がうらみあいをする

はじまりであるという。

ある本によれば「初めにツヌガアラシトが国にいた時に 黄牛(アムウジ)に農具を背負わせて歩いていたら黄牛はどろろに行つて消えてしまった。黄牛は食べられてしまったので ツヌガアラシトは代りに神体の白い石をもって帰った。白い石は童女になったので、自分のものにしようとしたが 童女は逃げつて日本へ渡った。童女は難波に来て 比売語曾社の神となった。又国崎郡(クニサキ)の比売語曾社の神となった。

解説

日本書紀は歴史書として形を整えているのでツヌガアラシトの記事は垂仁2年、日橋の東日は垂仁3年3月などと書かれているのだが、これは、伝説や伝承が書き記の編者の考えによって整理され、垂仁紀の何年の出来事であると位置づけられている為であって、歴史的事実ではない。ツヌガアラシトの記事は古事記の日矛の伝承と共通する部分が多いので、日矛の伝説からツヌガアラシトの伝説が作られたという説と、日矛を祖先とする氏族と、ツヌガアラシトを祖先とする氏族が異なっているため、別々の伝説であるという説がある。日本に聖皇

(ヒジリノキミ) がいると聞いてやってきたのだから 任那はミマキリヒコ(崇神天皇の名前をとったのだから 新羅人が赤絹を奪ったので両国の関係が悪くなったのだ

、などというは 日本書紀が作られた当時の大和朝廷の考え方がはっきりと出ている 白村江の戦いで日本と百済の連合軍は唐と新羅の連合軍に敗れ、百済は滅び、百済の高官は日本へ逃げて来て日本で活躍した。彼等は朝廷の頭脳(ブレン)となり、日本書紀にも百済の歴史書を参考にして書いている。

日本は文化や産業に力を入れ、法令や国家組織を整備し、税-国家として朝廷の力が充実してくると 新羅を悪者扱い、義親(ヤツシ)し、大國意識をもつようになった。ツマカアラシトの短い記事の中に、そういう日本書紀が作られた当時の社会的背景や朝廷の考え方がはっきりと表われている。だから注意して、よく勉強して読まなければならぬ。日本書紀において 最初の朝鮮関係の記事であり やがて後の神功皇后の「三韓征伐」の記事が受け入れられるようにとの布石である。実に上手に日本書紀は書かれているのであり 日本は任那を経営していたのは ウソではないかと最近では言われているが任那

の歴史を考へる上で重要な記事である。又、穴内にイツツヒコという者がいて、私が王だと言ったという記事も興味深いものである



II-2 天日槍来帰

(聖仁紀3年3月)新羅の王子天日槍が来帰した。もつて来たものは、^{ハホソ}斗太の王ノ箇。足高の玉ノ箇。^{ウツク}鶴鹿の赤石の王ノ箇。出石の小刀ノ口。出石の杵一枝。日鏡ノ面。熊の神籠^{ヒモロギ}一具、併せて七種類である。

ある本では 初めは天日槍は船にのって播磨へやってきて 実栗邑にいた、天皇は三輪君の祖大友主と倭直の祖^{ナガノスイケ}長尾布を播磨の国に使にやって日槍に聞いた。日槍は「新羅の国王の子であるが日本に聖皇がいると聞いて自分の国は争はずつて帰化した」と言た。そして献上したものは ^{ハホソ}葉和田の珠。足高の珠。^{ウツ}赤鹿の赤石の珠。出石の刀子。出石^{ホコ}の槍。日鏡 ^{ヒノカガミ}熊の神籠 ^{クマ}膽狭^{ヒモロギ}の大刀の口である。天皇は「播磨の^{イサ}実栗邑と淡路の^{イサハラ}出浅邑とをとお前

に任せると言ったが日橋は「私は諸国を回って気に入った所に住もうと思つ」といった。日橋は免道河より逆のぼつて近江の吾名邑にしばらく住み、近江より若狭をへて但馬に來て住んだ、近江の鏡村の谷の陶人は天日橋の従人である。日橋は但馬の出石の人、太耳の女、麻多鳥と結婚し但馬諸助が出来た、諸助の子が但馬日橋行、その子が清彦、その子が田道守と云う

解説 古事記では、日矛がやつてきたと書いているのに、日橋が帰化したという表現になっている。書紀の方は国家意識が強いのである。宝物と古事記と異なっているが玉、刀、鏡の三種の神器が出ているのは注目に値する。まぎれもなく玉や刀や鏡は朝鮮から多く伝わってきて、しる宗教的な道具として使われ、日矛のもたらした宗教は天皇家の祭祀になっていくのである。

但馬に到るコースは近江を通るコースになっている。近江も日矛を祭る神社が多い。

鏡村というのは蒲生郡庵王町で鏡山があり鏡神社がある。付近に須惠器を作っていた集団がいた。信樂焼で有名な信樂も須惠器から始まったもの

で信樂は新羅(焼)から來ているという。

日矛の嫁さんは古事記と親子が逆になっているが、ミミという名前は重要で和馬台国(倭國)でとくる和馬国のミミ、ミミナリや神武天皇の系統にミヤミのつく名前が出てくる。

谷川建一はミミの一族は鍛冶技術者であり、天日橋を鉄と同時に青銅技術の象徴であったとみている。

倭連は始祖が神武の道案内をした椎根津彦で、その子孫が長尾市で大和神社を祭った人物であり、その子孫が出石神社の神主の長尾さんであるという。

記紀ともに日橋は大和に入らなかつたとなっているが大和の中にも日矛の伝承があるのは、どう考えるべきかも大問題である



II-3 出石小刀

天皇は「天日橋がもつてきた宝物が、但馬にあるそうだから、その宝物を見たい」と言った。

天日橋の曾孫、清彦は宝物をさし出した。

ただし、出石小刀だけは出さずにおこらうと思つて衣の中にかくしたが天皇は酒を